

阿嘉島海中ガイド

阿嘉島臨海研究所

Under water guide to Akajima Islands
... Basic line survey at two locations around Akajima

AMSL

「みどりいし」1号に引き続き、阿嘉島を研究用フィールドとして利用する際の参考となる基礎データを提供する目的で、研究所からのアクセスが容易なサクバルノハナ東側斜面（通称サクバル）と慶留間島西側斜面（慶留間西）の2ヶ所において底質・生物調査を行ったので、その結果を報告する。海藻植生については24頁に詳しいので参照されたい。

A. サクバルノハナ東側斜面

サクバル

阿嘉島の南端に位置し、切り立った巨岩の列が海面から突き出し独特の景観をつくり出している。海底も傾斜が急で水深30mまで落ちている。強い潮流はないが、浅所ではうねりがあるときは影響を受けやすい。サンゴの被度はあまり高くないが、カイメン類やホヤ類などは多いようで、これらの研究者には好評のポイントである。

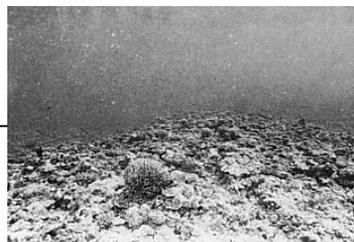
傾斜の最も急な部分。サンゴの被度は20%程度であるが種類は比較的多い。ダイオウサンゴとヤギ類が目についた。タテジマヤッコ、カスミチョウチョウウオなどが見られる

水深20mから10mまで



ほぼ平坦な岩盤で、所々に浅い溝や窪みがある程度。サンゴの被度は約30%。群体はどれもみな小さいが、種類は多く特定のサンゴが優占するようなことはない。スズメダイ類、ペラ類などの群れが常に見られる。

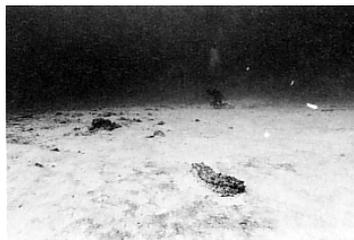
水深7m付近の礁斜面上部



緩やかな斜面となっており、小さな窪みや溝にはクサビライシ類が多い。サンゴの被度は低く5%未満。イソマグロの幼魚（写真）、ヨスジフエダイ等の小規模な群れを見ることはあるが単独またはペアで生活する小魚が多い。



水深25m付近の礁斜面下部



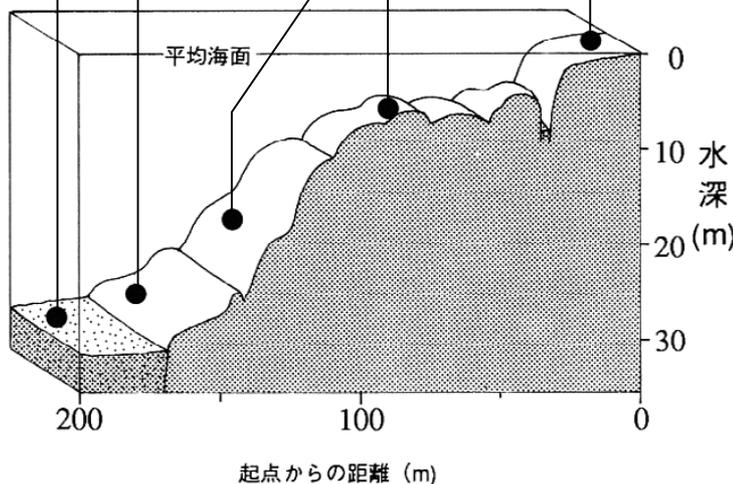
水深30mの砂底

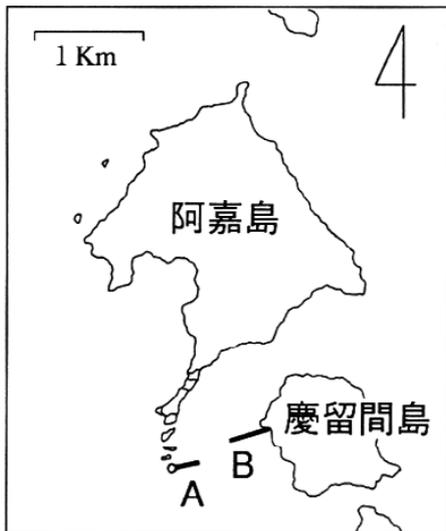
流れや波の影響を受けないため、底生動物の生息孔や移動痕もよく保存されている。また、砂の表面にはコテングノハウチワイワツタの一種などの緑藻類やウミヒルモが生育している。写真中央はアデヤカバイカナマコ。付近にコンクリート漁礁が設置されておりツバメウオやハマフエフキなどが見られる。



岸近くの水深1-2mの岩礁

汀線から30mまでは平坦な岩盤で、その先は大きな溝に落ち込んでいる。溝の水深は7-10mで底は転石となっている。岩盤上は波当たりが強いのでサンゴは小型で頑丈なものが多い。被度は約50%に達しミドリイシ類が多い。





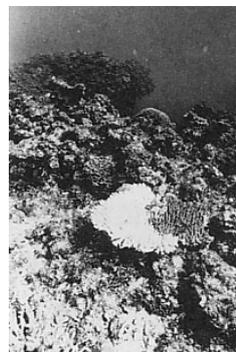
調査点
 A: サクバルノハナ東側斜面
 B: 慶留間島西側斜面

B. 慶留間島西側斜面
 ゲルマ西
 サクバルと対照的に水深の変化は小さく、様々な形をした根(岩礁)が連続している。調査測線の西端の根は通称ゲルクンの根と言われ、タカサゴなどが常に群れているが魚体は小さい。全体を通してサンゴの被度は低く、ミドリイシ類の優占も見られない。藻類、カイメン類、ホヤ類などの付着生物は多い。潮流はほとんどないが、阿嘉港とゲルマ港を結ぶ海上交通路になっているため注意を要する。



ゲルクンの根

根の上部は水深約 7m で周囲は 23m 前後まで落ちている独立した岩礁。サンゴの被度は 10%未満で小塊状のハマサンゴ類、キクメイシ類が中心。クサビイシ類も多い。根の周囲は転石帯または小石混じりの粗砂だが水深 25m からは細砂底になる。



水深 10-15m の岩礁

高さ 5m 前後の根が連続する。サンゴの被度は 5%未満。浅所ではミドリイシ類も出現するが巻貝によると思われる食跡が目についた。根の周囲の切り立った側面にはリュウモンサンゴが見られるが、ホヤ類などの付着生物も多い。



水深 12m 前後の岩盤

岩盤上面は平坦で南北方向の溝が走る。サンゴの被度は 10%未満で小塊状のサンゴが多く、ハマサンゴ類が優占していた。クサビイシ類も目につく。根の周囲は水深 12-20m の粗い砂底。



岸近くの岩礁

海底からの高さ 2-5m の岩礁。周囲の海底は小石または死サンゴ片の混じる粗砂。岩礁上はサンゴの被度は低く、小塊状のハマサンゴ、キクメイシ類が見られるがミドリイシ類はほとんど出現しない。藻類が多く、草食性のニザダイ科魚類が目につく。

